

第54回 日本ジオパーク委員会議事録

日時:2025年5月24日(土)10:00~14:45

場所:幕張メッセ国際会議場 2階 202会議室(JGC会議)

幕張メッセ国際会議場 2階 201会議室(新規認定申請地域公開プレゼンテーション)

幕張メッセ国際会議場 2階 201会議場(公開情報共有)

<委員長>

中田 節也 国立研究開発法人 防災科学技術研究所 火山研究推進センター 参事
東京大学名誉教授

<副委員長>

宮原 育子 宮城学院女子大学・宮城大学名誉教授

<委員>五十音順

欠 今村 文彦 東北大学 副学長(社会連携・校友会・基金担当)

欠 ヴォウオシェン・ヤゴダ 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構

大野 希一 一般社団法人 鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員

久保 純子 早稲田大学 教育学部(教育・総合科学学術院) 教授

柴尾 智子 元公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター シニアアドバイザー

欠 下田 一太 筑波大学・芸術系・教授

菅原 久誠 群馬県立自然史博物館 地学研究係 主幹

田中 裕一郎 産業技術総合研究所・地質調査総合センター・招聘研究員

欠 鳥越 寛子 系魚川ジオパーク協議会 事務局員
系魚川市産業部商工観光課ジオパーク推進係 主査

新名 阿津子 高知大学 人文社会科学部・准教授

橋詰 潤 新潟県立歴史博物館 学芸課 専門研究員

長谷川 卓 金沢大学理工研究域地球社会基盤学系・教授

山口 勝 日本放送協会横浜放送局 チーフアナウンサー
横浜国立大学総合学術高等研究院 客員教授

欠 渡辺 綱男 (一財)自然環境研究センター 副理事長

渡辺 真人 京都大学総合研究推進本部 リサーチアドミニストレーター

<関係省庁(オブザーバー)> 建制順

曾宮 和夫 内閣府 地方創生推進室 参事官
(内閣官房新しい地方経済・生活環境創生本部事務局)

柴田 伊廣 文化庁文化財第二課 天然記念物部門 文化財調査官

山越 隆雄 国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課 地震・火山砂防室 室長

古谷 晃佑 観光庁 観光地域振興部 観光資源課 自然資源活用推進室

鈴木 竜也 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官

<事務局>

古澤 加奈 JGN事務局長
山崎 由貴子 JGN事務局次長
本田 泰平 JGN事務局員
長谷川 唯 JGN事務局員

【① 挨拶・報告事項】

事務局:これより第54回日本ジオパーク委員会を開会する。

<資料確認>

最初に委員長よりご挨拶をお願いしたい。

委員長:おはようございます。皆さんよろしく願います。

報告事項だが、時系列的にいうと、Mine秋吉台ジオパークがユネスコ世界ジオパークに正式に申請した。その際、ユネスコから Comparative study をやるようにという要請があった。これは、Mine秋吉台ジオパークが阿蘇ジオパークと100km離れていないことから、規則に従ってその違いについてレポートを提出した。これについては、日本ジオパーク学術支援連合にお願いするのが本来だと思ったが断られたため、田中委員にお願いした。ありがとうございました。

3月初めに、パリで IGGP、つまりユネスコ世界ジオパークと IGCP が一緒になったプログラムの10周年記念イベントがあり、私とJGN事務局長が参加した。

それから、4月17日にユネスコの執行委員会において、新たにユネスコ世界ジオパークが16地域認定された。その中には、新たな国からの新規ジオパークとして、サウジアラビアから2地域、北朝鮮から1地域が加わった。これにより、結果的に50カ国229地域になった。世界遺産やエコパークに比べると、まだ1/4とか1/3程度の数だが、国としては半分近くになってきた。

それから、ユネスコ世界ジオパークの新規申請あるいは再審査の審査員が決定してきている。日本からも新たな調査員がデビューすることになっている。Mine秋吉台ジオパークについては後ほど報告があると思うが、フランスと中国の審査員が来ることになっている。

ネットワーク関係としては、GGNの下部組織として日本のGGN、つまりJpGGNというものを発足した。これには10地域と個人GGN会員が加わった形で組織されていて、コーディネーターは私、副コーディネーターは菅原さんになった。これがGGNに対する日本の正式の国内窓口ということになる。ただ、JGNがすでに活動しているので、JpGGNはJGNと一緒に日本の活動を盛り上げる役目を果たすことになる。以上が私からの報告だ。

事務局:事務局から報告をさせていただく。まず1点目、次回の第55回日本ジオパーク委員会は10月6日の月曜日の開催に決定した。まだ会場は決まっていないので、追って連絡する。

2点目、昨年度再認定された10地域のうち、箱根ジオパークに関してはまだ通知書が出せていない。案の段階で調整している。箱根ジオパークに関しては、日本ジオパーク委員会への意見書が3月28日付で届いたので、皆さんにもメールで回覧をしている。この点に関して、何かご意見等あれば、本日のお昼休憩前に予定している「その他」でお願いしたい。

それから、3点目、恐竜渓谷ふくい勝山について、こちらは報道もされているが、昨日5月23日に協議会の総会が開かれて、日本ジオパークネットワークを退会するということが正式に決定された。その旨を事務局から昨日の夕方に電話で伺っている。よって、今年の再認定の対象地域であったが、そこからは外れるということになる。

委員長:今の報告について質問があればお願いしたい。なければ、次の議題に入る。

【②現地調査員の確認】

委員長:質問はないようなので、2番目の現地調査員の確認に移る。事務局から願います。

事務局:配布した資料には、恐竜溪谷ふくい勝山も入っているが、今後はそれを抜いた形で確定させていただければと考えている。

委員長:これについて意見があれば願います。このうち、前期の喜界島は、新規申請なので、プレゼンがこのあと行われる予定である。喜界島の現地調査は、新規なので3人で担当する。

【③プレゼンテーションでの質問者等確認】

委員長:プレゼンテーションの質問者等の確認とあわせて、特にどういうことを聞かたいかというのを現地調査を担当する委員から紹介いただき、他にも聞いてほしいことがあれば願いたい。多分、2人の質問で大半の時間を使ってしまい、他の人が質問できないかもしれないので、質問してほしいことや時間が余った時こういうことを質問したいとか、そういうのがあれば願います。

副委員長:限られた時間であることと、喜界島のアウトラインは多分皆さんからご紹介いただけると思うので、まず私は、ざっくりと今回の喜界島ジオパーク構想が島民の方に与える影響と、その期待について聞きたい。委員からは2つご質問いただこうと思っている。喜界島はサンゴ礁をテーマとする日本で初めてのジオパークになる。鹿児島県は世界遺産やジオパーク、MABなど色々な枠組みで活動しているが、その中で喜界島がジオパークを選んだ理由は何かということと、喜界島サンゴ礁科学研究所は喜界島での軸になっていく組織になると思うが、ジオパークに認定されたら国内外にジオパークを訴求していくために、またジオパークになることでどのような期待を持っているかということについて委員からご質問いただこうと思っている。大きなことになるが、もし追加した方がいいことがあれば教えてほしい。

委員長:はい。申請書がある程度読まれたと思うので、その時に思われたこと気づかれたこと、不備なこと、あるいは感想を含めてあれば願いたい。

委員:去年、The Second 100 IUGS Geological Heritage Sitesにも推薦されて認定されたということで、まさにそのサンゴ礁で地球の年代を決めていくということ、それからどんな環境変動があったということを研究するメッカで、僕もそれを知らずにたまたまサンゴ礁の研究ということで、一昨年、喜界島サンゴ礁科学研究所に行ったら、「ジオパークを目指している」と聞いて、島をぐるっと回った。小さな町なのでまだまだ足りないところもあるが、県立高校である喜界高校は、全国からサンゴ留学生を受け入れている。研究所はその中心を担っているし、サンゴ礁の調査研究をとおして、地域と島外から来る人をつなぐような役割も果たしている。地質学的な評価はもちろんのこと、町として活動もいろいろとされているので、そこはすごく楽しみ。

一方で、財政規模はそんなに大きくはない。喜界島は、日本でサンゴ礁を世界に訴求できる地質学的価値のある場所だが、それを一般の人にどのように訴求していくのか、どのような戦略を持っているのかというのはとても知りたい。また、他のジオパークからこういうような資金があるとか、省庁の予算が使えますよみたいなアイデアをJGNで共有されるといいなと思う。

委員長:その他、何かあるか。申請の準備は2018年頃からだっただろうか。

事務局:2019年の日本ジオパーク全国大会おおいた大会では既にネットワーク活動に取り組んでいて、準会員になったのは2022年、申請は今回が初めてである。

委員長:去年も申請して良いだろうとは思っていたが、この1年の間にThe Second 100 IUGS Geological Heritage Sitesの認定を受けたことで、地域の盛り上がりも加わり良いタイミングでの申請になったと思う。

委員:サンゴのエリアは初めてだ。学術的にも非常に重要な場所で、サンゴ礁全体が隆起しており、そこも非常に有名。一方で、サンゴは鹿児島島の与論島や沖縄などにもあり、果たして「サンゴ」となった時に喜界島につながって

いくのか。学術的には人が来るが、多くの人に注目されるような、ほかとの差別化はできるのかという点について聞いてほしい。また、喜界島は直行便がなく、鹿児島か奄美大島経由の飛行機でしか行かれないなど、交通アクセスのハンデもある。サンゴも良いが、もう少し広くアピールできる素材はないかと思う。サトウキビももちろんあるが、沖縄にもあるし、もう少しインパクトのあるものが1つ2つあると良い。

委員：喜界島はゴマである。地殻変動があったからこそ、サンゴが隆起している。隆起サンゴ礁だし、沖に現生の巨大なハマサンゴ群体があって、そこはダイバーのアクセスもできるし、環境変動の観測もできる。過去から現在まで継続的に環境変動を抑えられる貴重な場所ではないだろうか。だからこそ、The Second 100 IUGS Geological Heritage Sitesになった。

委員：それをどのように来た方に見せるか。説明はできると思うが、見せ方の工夫が必要だろう。

委員：いくつか面白いところがある。ひとつ言われたのは、まさにアクセスや宿のキャパの問題があるので、だからジオパークになって何を期待されますかとお尋ねしたい。観光収入を増やしたいとなると、宿泊施設などのインフラ基盤がまだちょっと弱いので、どのように島の内外に訴求してジオパークとなることでどんなメリットがあると考えているのかについてしっかり伺いたいと思っている。

隠岐のように高校生の島留学にも取り組んでいるが、2泊3日や1泊2日で滞在しようとする、ホテルも限られていてなかなか難しいところがあるので、どのように整理されているのかを聞きたい。

副委員長：地質的な価値は世界的にも認められているという地域ではあるけど、ただ一般の方や、それから例えばこれから観光でもう少し振興したいという思いがあった時に、アクセスや、島内滞在のキャパシティー、環境負荷の問題を考えていかないといけない。そういったエリアのマネジメントを島だからこそしっかり取り組まないといけないという部分があり、そこは現地調査でもきちっと見ていきたい。

さきほどのコメントにもあったように、サンゴの島は沖縄などいろんなところがあるのでそこ何が違うのっていうのが一般の人に、もっと魅力的に映るようなものが必要。人の暮らしと文化的な側面もアピールできるようにしてもらえるといいのかなと思う。今日のプレゼンでそういったところにも触れてくだされば、皆さんへのお答えにもなるのではないだろうか。

委員長：そのほかあるか。

委員：喜界島は私の大学の先生が長いこと調査をしていて、私もゼミを一緒にしていたのでよく知っている。喜界島は、島列から太平洋側というか、フィリピン海プレート側にずれた場所に位置している非常に特殊なところで隆起速度もとても速い場所。世界でみても、ニューギニアの島や喜界島など、隆起速度の速い完新世の氷期と間氷期の海面変動や気候変動が綺麗に記録されている数少ないところ。場所が特殊だから特殊な地質が残ったところ。このことは、我々研究者などはよく知ってるし、すごく面白いと思っている。しかし、地域でその面白さを伝える努力をどのくらいされてるのかを知りたい。

おそらく今までは、あまり一般の方々には知られていなかったもので、研究調査もスムーズで支障はなかった。しかし、たとえばジオパークに認定されて保全活動を推し進めていくとなると、研究者にとってどのような制限がかかるのか、あるいは、どのようなメリットがあるのか。もっともっと世界的に発信していける場所なので、そこをどのように、研究者へのプロモーションをして研究が発展するようより盛り上げていくために、どのような仕組みを作ろうとしているか、もし時間があれば聞いていただきたい。

委員長：私も現地へ行ったり、報告書を見たりしたが、やはり地質学的な基盤についてあまり話していない。土台がどのようにできて、なぜ隆起速度が速いのかなどについてはきちんと触れられていない。そこは惜しいと思う。

委員：地質のことに少し知識があれば、とりこになるくらいとても面白いところ。ほかの島列よりもプレートの沈み込むラインが少し近くにあることで、なぜこんなに隆起速度が速くなるのかということも、地球物理的なことを考えると面白い。じゃあ、他に同じ場所があるのかと言われると、あっても海の中など、すごく特殊な場所ということもわか

る。そういうところでこんなことが起こると、こういう地質帯ができるというのも面白い。そのあたりの魅力を出しつつ、研究のプロモーションにも期待したい。

委員長:IUGSの申請書も私経由で提出した。しかし、Subductionのことを一言も触れられていなかったの、加えた。

委員:あとは黒潮もあるという特殊な環境。

委員長:そういうことを含めてぜひ追加質問していただきたい。

副委員長:私達以外でも良いのか。

委員長:委員であれば問題ない。

副委員長:時間があれば挙げていただいたものを質問していただきたい。

委員長:現地で聞いてもかまわない。

委員:現地での確認になるかと思うが、施設インフラについて。既存施設がジオパークに特化したものはなく、地域内の各施設で展示をしているとのことだが、サンゴや埋蔵文化財の展示は充実しているが、たぶんそれ以外の地域文化のところ少し弱い印象がある。また、オーバーラッピングで、「日本で最も美しい村」連合にも登録されている。文化景観なのに、これがなぜか自然遺産のところに分類されている。文化に関する意識が弱いのかも思わないと思うので、文化とのつながりについても整理、確認をお願いしたい。あと、オーバーラッピング。その相乗効果をどのようにするか。

委員:文化や産物については、町の方がお笑い芸人の方とコラボするなどして、YouTubeでうまく発信している。産物で言うと、ゴマで、日本一の生産量がある。ほとんどが中国からの輸入だが、国産のゴマのほとんどが喜界島産である。

文化景観では、サンゴ礁を使った石垣の集落があったり、源氏と平家がそれぞれたどり着いたり、サンゴ礁に地下水が出たところがマールのような入り江になっていて、そこが集落や到着の地になっている。戦時中に特攻機を隠した構造物、戦争遺産なども現地に行くと案内表示がなされている。

ジオパーク活動をする上では、やはりビジビリティとか解説看板の設置などが求められる。3年前に行った時、その辺りがやはり弱いと感じた。なので、もし我々が標準どおりに求めるとすると、あの町の財政基盤でいくつ作れるのかということが気になりであるので、そこをうまく補助するというか、お金を出す知恵というか、JGNの会員やJGC委員にアイデアがあるのであれば、そういうものを出してはどうか。すごくいいコンテンツもあるし、活動もしているが、さっき言ったような、アクセスインフラと宿泊インフラ、それからビジビリティとかを進めていくのはかなり難しいんじゃないかなと思うので、そこをどうやって盛り立てていくかというのはすごく気になる。

委員:看板があれば、そこにシールを貼るだけでも良いと思う。

委員:いま、頑張っているところ。まさに、隆起したサンゴのある場所、今にも海の中にいたのが真っ白になって出ているのが分かりやすいところに1つ設置された看板を拝見した。1つ作ってみたということだったが、まだその1個しか作れてないという様子だった。

事務局:島への入口が2カ所なので、たとえば、ビジビリティはそこでQRコードなどや新たなテクノロジーを駆使し展開してもよいかもしれない。新しいスタイルのビジビリティ向上として可能性があるだろう。あとは、縄文遺跡群とか。

委員:縄文文化については、台湾から沖縄、種子島とかも出ているが、その間の縄文の分とか。古墳時代や弥生時代の道路の跡とか、新しく隆起しているところなので。何がいかというと、ハブがない。だからやっぱり昔から人が住む。喜界島の人に聞くと、「奄美大島にはハブがいるから、夜、車のドアを開けて降りたら地面にハブがいるかもしれない。だけど、喜界島では安心して森の中にも入れるから農業もできるし人も住んできたんだ」と話していた。そして水もある。いまは、地下ダムというものを作っているが、古代であれば暮らすのにこまらない水はあっ

た。黒潮文化で言うと、あそこの言葉と糸満の漁師さんと同じ言葉だったり、漁法が糸満漁師のものを受け継いでいたり、一方で、平家だ源氏だっというところが流れ着いたり、まさに日本と琉球の文化がたどり着いたマージナルなところでもあるので、文化的な面白さも当然推進協議会の皆さんも理解はしているが、これをどのように発信していくのかというところだろう。

委員長：なんだかもう審査に行かなくてもいいくらいだ。あまり色眼鏡で見ないように気をつけて。

そのほか何かあるか。

委員：現地での確認になるだろうが、サイトの設定について、展望台や信仰など、いわゆるビューポイントにしたほうが良いものもサイトに入っている場合があるようなので確認いただきたい。さきほどの遺跡の話もかなり面白かった。サンゴ礁の北限に近いところでハブのいない安全な場所なので、古代の政権は喜界島にかなり勢力を投下して南の抑えとしていた。夜行貝もみんな欲しかったので、特別な儀式用の酒器にしていた。そのあと、琉球王朝におさえられる。地形地質の背景があるからこそ、歴史も非常に特徴的なものとなっている。その辺が上手く連携できているか確認していただきたい。

委員：国立公園の範囲についてはどうだったか。環境省関係のビジターセンターはあるのか。

オブザーバー（環境省）：国立公園であるが、施設はまだない。

委員長：そのほかに質問などなければ、この辺で閉じてプレゼンに向かう。

それでは、これで第1部を閉会する。

【日本ジオパーク認定申請プレゼンテーション】

喜界島

（発表15分、質疑応答15分、計30分）

JGC会議継続

【① 新規認定申請地域現地調査の可否】

委員長：それでは、第2部を始める。まず、新規認定審査の現地調査の可否だが、可として問題ないと思うが、否としての方はいるか。

一同：（否とする意見無し）

委員長：いないようなので、可として現地審査を行いたい。先程の質疑応答でも意見があったが、ぜひ、これを現地で確認してきてほしいということがあれば、付け加えることがあればお願いしたい。

委員：先程も話したが、学術的に非常に有名なところというのは、わかっている。地質を知る人たちにとってはとても魅力的な場所だが、一般の方々に対して、この一般というのは、さっきのプレゼンでは島内の方を指しているようだったが、島外の方々に、どうやって足を運んでもらうかというプレゼンがなかったように思う。地域の方は自負しているが、島外の人に島の魅力をどのように見せるか、PRの仕方が重要になるだろう。それから、島内に来た方たちに海岸段丘を見せれば、島の隆起が分かるのかというところではない。そのあたりの説明も含めて伝え方を検討した方がよいかもかもしれない。

本来は地質のことだけでなく、島には洞窟の話や蛇の話があったり、琉球列島からちょっと東側にあることによってすごい特異的な場所であるにもかかわらず、今回のプレゼンには入っていなかった。隆起のことがメインで、ジオパークになった時に果たして人が来るのだろうかという懸念がある。

副委員長：ありがとうございます。大事なことだ。

委員：さきほどの話に関連して補足。隆起はもちろん非常に面白いが、それがたとえばプレートの動きとどのように関連しているのかなど、学術的なところも上手に発信していただきながら、地球全体を感じられるというようなパッ

ケージにして、もっともっと前に出すと、その場所に立ってみたいという気持ちも湧いてくるかもしれない。ぜひそういった仕組みについても考えていただきたいし、現地調査ではぜひ聞いてもらいたい。

それから、黒潮が島の西側を通るか東側を通るかによって、おそらく生き物も少しずつ変わってくるはず。特に、黒潮の流路の歴史のようなものが、おそらく生態や古生物の研究者によってなされている。このようなジオパークのコンテンツの開発をどのように進めていくかをぜひ聞いていただきたい。

委員：プレゼンを聞いた印象だが、やはり話題がサンゴに集中しているようだ。喜界島は、陸からかなり離れたところに溜まってできた砂泥岩互層が移動してくるからサンゴができるような環境に移行してきたみたいなの、すごく大きな話ができる要素があると思うが、それについてはほぼ触れられていなかった。だからその部分も込みでダイナミックな大地の移動、地球の全体の動きみたいなものをストーリーの中に組み込んでいくといいのかなと思う。そういう意味では、基盤の島尻層と、サンゴ礁や石灰質砂岩の下にある早町層などの砂岩泥岩互層にもちゃんとフォーカスを当てて、ストーリーの中に組み込んで欲しいなと思った。

委員長：良いポイントだ。

委員：研究員の方は、喜界島サンゴ礁科学研究所に所属している。先ほども言っていたとおり、総合地球環境学研究所のプロジェクトのリーダーをされている。地球研のプロジェクトはフルリサーチで5年であるが、その2年目。2028年度まで大きな予算のついた研究が行われる予定になっているため、今とても良い環境で研究に取り組めるような環境になっていると思うが、この研究期間が終わった後にどういう風に変容するかというのが気になるので、関係者の考えや予想について聞いてきてほしい。

この地球研プロジェクトのテーマは「科学とアートの融合による環境変動にレジリエントな在来知の再評価と未来集合知への展開」。科学とアート分野で在来知に関する研究に取り組むというのもジオパークと親和性が高いと思う。文化をどのように集約するのかという部分はプロジェクトに含まれるのだろうか。プロジェクトと適合しないところをジオパークとしてどういう風に進めていくのかというのが気になる。

副委員長：立ち上げ時の今は、研究の一環として予算がついている可能性があるけれど、現在のプロジェクトの期間が終わるとどうなるかということか。

委員：大きなファンドがついていると、期間が終わると人もお金もなくなってしまう。

委員：申請書の予算を見ると、町の小さな予算しかなく、昨年よりも頑張りますというような書かれ方しかなかった。

委員：小規模の予算でそのまま続けて行くというマネジメントしていれば、それほど影響は大きくないと思う。

委員長：そのほかにあるか。

委員：プレゼンを聞いて、子どもたちへの教育にとっても意欲的に取り組んでいることがわかった。やはり、どの様な体制で何に取り組んでいるのか、そのあたりについて知りたい。

委員長：そのほか意見はあるか。調査の日程調整はこれからか。

事務局：まだ日程の希望は聞いていない。選挙の日程などの兼ね合いもあるだろう。

委員：7月20日が参議院選挙になりそうなので、それまでは町役場は動けないだろう。8月入ってからになるのでは。

事務局：本日、担当者も会場に来ているので、後ほどお二人の候補日を相談してほしい。

委員長：それでは、ほかにご意見がなければ以上としたい。

一同：(意見無し)

委員長：それでは、現地調査についてよろしく願います。

【② 島根半島・宍道湖中海ジオパークのエリア拡大について】

委員長：それでは事務局からお願いしたい。

事務局：ジオパークのエリア変更申請書が島根半島・宍道湖中海ジオパークから提出され、3月にメールで委員に送付してある。変更内容はエリアの拡大。エリア変更で海域のみを変更するものとなっている。島根半島・宍道湖中海ジオパークは、島根県松江市と出雲市全域が対象エリアとなっていて、日本海側に複数存在する離島を含めて陸域のみの面積となっていて、飛び地があるエリアになっている状態だった。エリアを一筆書きできるようにするため、今回水域を含めたエリアに見直すということになっている。

エリアについて簡単に説明する。島根半島の東部地域と西部地域に設定されている大山隠岐国立公園の海域と調和した海域設定をするということ。大山隠岐国立公園の島根半島地区の海域は汀線から1kmの範囲に設定されている。ただし、島根半島中央部の松江市鹿島町御津と出雲市十六島湾との間は国立公園に指定されていないので、この間は国立公園と同様に汀線から1kmの範囲に設定するとしている。ただし、東側の松江市美保関灯台から約3.5km北東にある「沖の御前島」については入っていないため、ここについては、美保関灯台と沖の御前島灯台とを結ぶ直線を基準点として、それぞれ北西と南東方向に500mの幅を持って設定するというもの。変更するエリアの陸域は0%、水域を含めた変更するエリアのパーセンテージは111.8%の拡大になる。ジオパークサイトの増減はなく、拠点施設の増減もない。変更について話し合う公的な相談の機会を設けたかに関しては、「はい」と回答している。

委員長：ありがとうございます。承認を受ける予定とあるが、承認は得ているのか。

事務局：3月に承認を得ていると聞いている。

委員長：先程の申請について、何か意見はあるか。

委員：西側はなぜ陸域のみで、汀線から1kmの海域をエリアに含めていないのか、何か理由があるのか。

事務局：これは申請書にも書かれておらず、国立公園のエリアではないからなのかと推測している。

委員：エリア外のところでも汀線から1km設定したというところがあるので、西側の大社湾のところを含めない理由付け、もしくは拡大などの検討を進めると良いのかなと。

事務局：東側のような飛び地になっている島が無かったからなのではないかと思う。

委員：そうすると、東側の島は離れていたわけか。

委員長：飛び地だった。

事務局：それは以前、前回の現地調査で指摘されていたかと思う。

委員長：その他質問はあるか。

これは、西側エリアについての問題はあるが、国立公園に左右されたエリアの拡大という理解で良いか。とは言ったものの、東側の美保湾は入れていないようだ。でも、海域ではないからか。海域の国立公園部分だけを加えて飛び地のところを繋いだというところだろうか。

委員：たとえば、沖合に離岸堤みたいなものがあるが、そこは入らないということか。大社湾の砂浜のところ、海岸線に線が引かれている。

委員長：今回の拡大では国立公園の海域のところだけを考慮したものだろう。

委員：でも中海は水域を含んでいるようだ。

委員長：中海のところは、以前の境界のままよいか。

事務局：ここは変わらない。

委員：宍道湖中海はもちろん、水域を含んでいる。大社湾のところだけは海岸線で区切られているようだ。

委員：地理院地図で見ると、田儀港のあたりに岩礁が見られるようだ。沖合の50m100mくらいのところに。

そこが含んでいるような気もする。

委員：ここも汀線から500mか1kmの範囲で海域を含めば、全て入るのではないか。ここは含めなくてよいのか。

委員長：それは今の国立公園には入っていない。

ほか、なにか提案があればお受けするが、もし何もなければ申請書どおりに進めたい。

委員：大社湾のところは海岸線を境界とするとなっているが、拡大すると海岸線ではない。どのように解釈したらよいのか。

事務局：そのあたりはトレースの仕方かと思う。

委員：申請書については1回やり取りできるのか。

事務局：かなり前に申請されてきたもので、一旦早く認めていただきたいというのが現地の希望。もし今、5月に申請して次の秋の委員会を待つなら、去年の鳥海山・飛島のパターンだが、現地は早めに整理を進めたいという希

望である。もし更なる修正が必要なら、この秋に現地調査でアドバイスをしてきていただければと思う。

委員長：今決めないといけないのか。

事務局：申請書は3月付けになっているが、質問などのやり取りを事務局で3往復くらいしていた。そのため実は申請の動きはそれよりも前からあった。

委員長：ここで決めずに、現地に行ってからアドバイスをしてまた再度申請となると、それから持ち帰って1年ぐらいかかる話になる。私の提案は一旦ここで了承しておいて、さらに修正が必要ならばその後もう1回出していただくというのがいいのではないか。

それでは、そのやり方で賛成の方は挙手をしてほしい。

(賛成11名、反対1名)

委員長：反対の理由は何か。

委員：北側は国立公園に認定されていないところも線を引いているのに、大社湾は線を引かないという判断基準に矛盾を感じる。現地の特別な理由があるのであれば、それはヒアリングする価値があると思う。1回ここでは承認してから現地で事情を聞いて必要があれば修正するとした方が、はたから見て違和感はないだろう。

委員長：それでは、そういう理由もつけて承認とする。ありがとうございました。それでは次の議題に進む。

【③ 2025年度ユネスコ再認定審査事前確認情報共有】

委員長：2025年度ユネスコ再認定審査事前確認情報共有ということで、これに関しては阿蘇と白山手取川について行う。

阿蘇に関してはプロGRESレポートを読んだが、指摘事項についてはある程度自分たちの見解を示して、ある程度の改善をしているとのことだった。ただし、申請書を見たらわかると思うが、事務局で100%従事している人は3人しかいない。その他、表の下の方に100%と書いてあるが意味がよく分からない。一生懸命やっているが、やはり事務局体制が弱体しているのではないかと思うので、この辺は現地に行った際に会長と面談する機会もあると思うので、強く改善してほしいということをお願いしたいと思う。

事務局：補足させてほしい。実はまだ会長が決定していない。この資料は、ユネスコに来年の1月に提出する下地になるもので、今、会長になるであろう新市長の名前が入っているが、まだ決定ではない。このままいけば新市長が会長になる流れになるだろうが、今後の予定というレベルだ。

委員長：総会は開いていないということか。

事務局：総会は開かれた。市長就任直後だったため、その時にはまだ決まらなかったようだ。

委員長：そういう形で事務局にも指摘すると、その周りの協議会のメンバーがいれば、そこにも入れるようにしたいと思う。

委員長：資金についてはデザインセンターからは、もう担保されていないのか。

事務局：現地でぜひそのあたりも確認をお願いしたい。

委員長：デザインセンターというのは、阿蘇地域振興デザインセンターのこと。デザインセンターには予算があり、その予算をジオパークのために使うという仕組みだったが、今やデザインセンターの位置づけが弱くなり、事務局も実質そこにはないようだ。

事務局：場所は移ったが組織としてはまだデザインセンターに事務局がある。

委員長：そのほか、日頃の活動を見ていて、あるいはプロGRESレポートを読んでなにか気づかれたこともあれば意見をお願いしたい。

事務局：前回のユネスコ審査で同行サポートされた委員から何かあればお聞きしたい。

委員：当時は、今ほどそこまで資金面で厳しくなかったと思うので、そのような事務局の状況の話もそこまでしなかった。ちょうど、事務局の体制の変わり目だった。

委員長：指摘事項への対応も概念的なことが書いてあって、具体的な対応は書いてない。

副委員長：プロGRESレポートというより阿蘇の話題ということで、特にインターネットなどで、自然エネルギーの太陽光パネルの設置で景観が損なわれるとか環境破壊などの話題がよく出てくるようになってきている。そういうところに対してはジオパークがどういうスタンスでいるのか、ないしは、その課題に対してジオパークが取り上げているのかどうかということを知りたい。ユネスコの審査で、自然エネルギーに対してどういう見解を持っているのかわからないが、これからのジオパークの将来にも関わってきそうだと感じる。

委員長:景観について公に議論したことはないが、エネルギーとして石油化石エネルギーに変わるものであるから、カーボンフリーの活動を推進すべきであるという形にはなっている。

委員:銚子の風力発電などもあったと思う。

委員長:ここでも以前議論した。ただ、阿蘇の場合は新規には作っていないだろう。昔からずっとあるのではないか。

副委員長:かなり広域で太陽光パネルがある。

委員長:確かに太陽光パネルはあり、噴火で駄目になったという話も聞いた。

それについて、ジオパークとしての見解を持っているのかについて聞いてきたいと思う。

そのほか、特になければ次の白山手取川に進みたい。なにか気付かれたことがあればお願いしたい。

委員:白山手取川については、前回の認定時の指摘事項であったパネルの設置などの可視性についてはかなり解決されたのかと思う。そこは確認する必要がある。それから、桑島化石壁は重要なサイトなので、地質情報の発信とともに保全が一番大事なので、監視カメラなどをつけてはいるようだ。一方で、回り込まないと見えないので、見せる工夫と保全とその辺をどういう風にしてやっていっているのかは確認したいところ。それから、エリアの境界がしっかり出されているかなども確認する必要がある。

委員長:ありがとうございます。

事務局:前回、委員長と同行した。指摘事項の1番目のマップを改良するという点は、博物館の入り口に、新しく床地図を審査に間に合うように作っていたが、その地図がゾーニングマップみたいになっていた。山のエリアとかを丸で囲んでいて、エリアがどこかよくわからないようになっていた。これは対応しないといけないというのがこの指摘事項の意味。その後、カウンシルの中でも、やはりジオパークではゾーニングはしないという話になったので、今はおそらくゾーニングなしの地図に改良されているはずである。ただ、ここはユネスコ・エコパークと重複しているエリアなので、もしかしたらゾーニングの意識があったのかと感ずるところもある。そのあたりがこの指摘に対してしっかりと改良されているのかを必ず確認してきていただければと思う。

委員長:そのほかあるか。書き方の問題だと思うがここは事務局員が多い。担当課の職員を全部あげているからだと思う。

事務局:エコパークの担当者とも重複もしている。

委員長:この部分はジオパークの担当である、というようにわかるようになっていけばいい。そのほか、意見はあるか。

事務局:もう1点。桑島化石壁の国際的な地質遺産としての価値というのを申請の時にも打ち出して認定されたが、前々からのテーマが「水の旅、石の旅」ということで、手取川のところをかなり取り上げていて、それ自体は重要なことなので良いのだが、その後、桑島化石壁の価値についてどういう風に取り扱われているのかというところも少し気になっている。

副委員長:対岸に資料館があったと思うが。

委員:白山恐竜パーク白峰

副委員長:リニューアルや展示内容は変わっているのか。展示内容が少し古いという課題があったと思う。

委員:それについては指摘事項にも入っていた。

委員:一般のお客さんが多く入るようなところはあまり変わっていない。学術的な展示は新しい内容に変えてはいる。

副委員長:ユネスコの審査での指摘事項としてそういった展示については入っていないのか。

委員長:そこはなかったが、パートナーシップ協定をきちんと作るようにという指摘はあり、既に20以上の団体と公式の連携協定を結んでいるようだ。

田中委員:それなりに多いので、整理されていれば良いかと思う。

事務局:前回の指摘は、その基準が何かというのをすごく聞かれた。ざっくりとした基準しかなかったため、整理が必要だという指摘だった。

委員長:検討中とは書いてあるので、この辺を確認していただくと良いだろう。それでは良ければ次の話題に移りたい。

【④ 2025年度ユネスコ審査・再認定審査の確認】

委員長:2025年度のユネスコ審査・再認定審査の確認について、事務局願います。

事務局:今年は5地域。Mine秋吉台が新規申請をしたので、それプラス再認定の対象地域が4地域となる。日程順に報告する。島原半島が7月1日から5日までの予定。デンマークの方と中国の方が来られて、JGCからのサポートは委員1名に行っていていただく。その次は隠岐で7月2日から6日。ハンガリーの方とスペインの方の予定。隠岐には委員がいるためJGCからは誰も派遣しない。その次が伊豆半島で7月5日から9日。中国の方とインドネシアの方が来る。委員1名に同行サポートで入っていただく。Mine秋吉台が7月8日から12日で、フランスの石灰岩地域のジオパークの方と中国の方。JGCからのサポートは、現地の希望により、委員長と事務局から1名。糸魚川は7月27日から31日で、ベトナムの方とスペインの方の予定。糸魚川も委員がいるので、JGCからの派遣はない。

ユネスコの現地調査に、まだユネスコの調査を経験されてない方、見たことがない方に関してはオブザーバーとして行っていただく機会がある。昨年、委員1名がウェイティングだったが、希望があれば伺いたい。

委員長:ありがとうございます。先程もあったようにもしご希望があれば今のうちに立候補していただければ。

Mine秋吉台は、もう1名委員も行くのではなかったか。

事務局:Mine秋吉台の相談役として委員1名が対応される予定。

委員長:了解した。今の件についてご意見あれば。旅費は現地が出すのか。

事務局:委員にサポートで来てほしいという希望があれば現地が負担し、オブザーバー派遣でJGCから行く場合はJGNから支払う。

委員長:オブザーバー参加は遠慮される必要はないと思う。

あるいは再審査について何か言っておきたいということがあればお願いしたい。

委員:島原半島の3つの構成自治体の担当者のローテーションが、従来のように運用できていないようである。また、たとえば、協議会に欠席がちな委員がいる状況が続いているなど、協議会の体制がうまくいってない状態だと考えられる。島原半島をどういう風に、誰がどうサポートしていくのか、結局は内部の話なので内部のコミュニケーションがどういう風に円滑に進むようになるのかが重要だと思う。そのためには中だけで進めるのは難しいこともあるのではないかと。外から何らかのサポートが必要かと思う。また詳細は共有させていただきたい。

委員長:ありがとうございます。ジェンダーバランスについても問題があると前回の事前確認で指摘した。それについては、審査までに改善されるかどうかかわからないが、委員が行ってどれだけサポートできるかだがなかなか難しい。

委員:サポートするのがいいのか、もしくはありのままにどう改善したらよいかを議論するのが良いのか。

委員長:それでよいと思う。特にグリーンにしてほしいと要望するのではなく、事実は事実としてきちんと認識してもらうことは重要だと思う。

事務局:一応、女性のパートタイム職員が増えた。ゼロではないはず。

委員:その新しい資料は現地で用意するのか。スタッフ表の変更は出すということでのよいのか。

事務局:1月に提出した時点ではゼロだったのでそれは仕方がない。現地調査のプレゼンテーションに入れる必要があり、資料としては追加されていないので、ここは大事だと思う。

委員:事前に当日のプレゼン資料は見たほうがよいのか。そこまでしなくてよいのか。

事務局:できる範囲で今回の場合はした方がよいかもしれない。

委員長:法人化はどうなったか。

事務局:今年の春までにという点については、まだ決着はついていない状況。

委員長:そのほかの地域で何か共有事項はあるか。

委員:伊豆半島に行く。去年も事前確認に行ったので共有したい。去年行った時も、今年の春先までには、まだ終わっていない改善作業等をやり終えたいとのことだった。併せて、ジェンダーバランスや新しい看板も。看板の改修もしてくださいとお願いしたので、やっているはずだと思うが、今の時点ではわからないのでそこは少し不安。

事務局:ここはかなり進めているという話だった。

委員:それなら良かった。それから、前回問題になった地質資源の販売について、パートナーから外してあるので触

れられることはないと思っている。ただ、エリア内にそういう地質資源を販売しているところがあるという事実を指摘された場合は、どう対応するか。実際、販売も縮小しているということだから、改善はすすんでいるというような話であれば問題ないだろうか。

事務局：そういう対応をする予定とのことと、先日事務所に相談に来られた担当者から聞いた。というのが、中国の調査員は日本留学経験があって、こちらから情報を出さなくても、これは何だという質問が来るかもしれないということを想定してお話をした時に、聞かれた場合は、減らしてもらおう努力をされていて、そこはパートナーではないというような説明をされるということだった。

委員：事務局にも進捗状況などを確認しておこうかと思う。

委員長：そのほかないか。

事務局：糸魚川は、審査事前確認で2名行かれて、指摘された点についてそこからの最新情報を持っていない。

委員長：海岸の石か。

委員：組織（統合）に向けた課題が大きいと思うが、今回どこまで説明されるのか。

事務局：そこはわからないのと、会長が変わられた。すでに積極的にネットワーク活動にも参加していただける兆しはあり、前向きだと思う。

委員長：そのほかはよいか。それではこの議論は終わる。

【⑤ その他】

委員長：それでは、その他に移る。皆さんから気づかれたところや質問があればお願いしたい。事務局からなにかあればお願いしたい。

事務局：恐竜渓谷ふくい勝山については、残念ながら退会となった。日本ジオパーク認定の際には、準会員が申請して日本ジオパークに認定されたら、自動的にネットワークの正会員になるという仕組みになっている。この逆で、ネットワークを退会したら日本ジオパークでもなくなるということになる。恐竜渓谷ふくい勝山が退会した理由として、審査の仕組みに疑問があるというようなコメントが出ている。また、一緒の話にしていいかどうか分からないが、箱根からも日本ジオパーク委員会への意見書という形で、あり方について改善すべき点があるのではないかなというようなご意見をいただいている。特に箱根に関しては、これからのこともあるのでぜひ話をさせていただきたいと思う。通知書に関する意見が前半にあって、後半は審査システム自体についての意見である。前半のところは通知書案に反映できるところを反映したり、その中でのやり取りで説明をしたりという風にして、今一旦現地の方にお戻ししていて返事を待っているところだ。審査システム及び体制について意見があるということで書かれているが、それに対して委員会として今後どのように対応していくかについて、今日ご意見を伺いたい。

委員長：具体的にはどのようなことが疑問なのか。恐竜渓谷ふくい勝山にしても箱根にしても審査結果に反論できる仕組みがないってということに対する意見なのか。

事務局：恐竜渓谷ふくい勝山に関しては報道を受けてのところは中身が書かれていないのでわからない。現在ユネスコのガイドラインに即した形でやっているが、日本ジオパークはユネスコ世界ジオパークと同じぐらい厳しくしなくても良かったのではないかな、ということは私が訪問した時に会長から聞いている。

箱根に関しては不信感が広がっているというようなことが書かれている。今日は箱根の方も来られているので、調査に行った方がアプローチをしてくださるというふうにお伺いはしている。

委員：夕方、1時間ほどミーティングをする予定。

委員長：原則は、ユネスコの運営ガイドラインに沿っているというのは、日本の審査の場合も同じで、ユネスコ世界ジオパークの場合は一旦カウンスルで決めたことは一切覆らない。日本でも踏襲しているという答え方が一つだと思う。しかし、2023年以降、いろいろと歩み寄りをした。しかし、歩み寄っても相手に理解されないというか、結果が覆らないのは気に食わないというところがあるのか、そこはあまり踏み込んでも仕方がないかなという気がしている。ただ、丁寧な説明をして結果を出す前に意見は言わせてほしかったということが本音ではないのだろうか。委員会では報告書に基づいて議論しているのだから、それ以上に改善する方法はあるだろうか。

事務局：プレスリリースの書き方が、やはりすごくショッキングだったということはあった。

委員長：それはあった。それで我々も反省して、そこは変えましょうという議論はした。

事務局：箱根に関しては、事務局体制についてリリースしたが、ジオパークを広域でやる場合の事務局体制という委員会で意図したものと違う意味で捉えられていると思う。お互いに分かりやすい表現にできれば良かったかなと

思う。このままではお互いに分からないことがあるので、直接話し合いをした方がよいと、何回かメールや電話をしたが、文書でのやり取りにしてほしいと主張された。しかし、この文書に対して文書で返したら分かり合えるのかという、それは難しいようにも感じている。

委員：誤解を重ねそうだ。

委員：あの文書が届いたこと自体、委員会としては理解できないという立場をちゃんと伝えた方がいいのかと思う。文書でのやり取りを重ねると、なんだか悪い方向に行きそうな気がする。

事務局：文書でというのは、かなり初期の頃から言われていた。最初は宛先が明記されていなかったの、宛先を明確にしてほしいと伝えたが、正式文書を求められたと捉えられた。

委員長：本来、通知書は議論した内容を伝えるだけの目的であって、その正確さを期するために現地とのやり取りをしていた。しかし、今は現地が通知書の中身にまで、これは違うだろうと言ってくるようになってきている。ちょっとおかしい方向に来たとは思う。

委員：そう思う。なぜ、このような文書が来るのかなと思う。仕組み自体を分かっていないのかなと思ってしまう。

委員長：この議論について、特にこの機会に言っておきたいことなどはあるか。

副委員長：最近、審査結果に対して、地域の様々な方たちからの反応が色々ついてくるようになって、結果をすんなり受け取らないという状況がある。でも、それは多分地域の色々な事情があるのだと思う。やはり、こういう活動に対して、自治体が事務局をやっているところは費用対効果であるとかが重要だし、各自治体の財政状況は非常に厳しくなっているため、活動による成果をより明確に求められてくるようになってきている。ジオパーク活動にかかる費用も年々膨らんできていると思うので、自治体の立場として、スムーズに結果が通らないことに関して、なかなか自分たちも納得できないのと、納税者を含めて説明できないような状態になっているところが、前よりもシビアになってきているのかなと思う。

委員：申請する地域に向けて、コストパフォーマンスを考えていただきたいというのは言ってきたつもりだった。ジオパークで地域が短期的にはなく中長期的にみて得をすればと思ったら続けて、それで見直してダメならやめたい。お互い傷つけ合うような形でやめる必要はない。

委員：恐竜渓谷ふくい勝山は、たぶん、政治的な判断だったのではないだろうか。

事務局：恐竜渓谷ふくい勝山で熱心に活動されてきた市民の方、ガイドさんたちは、これでもうジオパークのガイドとして活動ができなくなるってということに対してすごくショックを受けているし、別の方法で何らかの活動ができないかと模索していきたいと聞いている。思いを持って取り組んでくれた方々がいて、その人たちにも影響をもたらしているということは、我々も受け止めなければいけないと思う。

委員：簡単な話ではないが、もし同じような状況の地域があるのなら、JGCがイエローカードを出さなくても辞められる仕組みを作った方が、双方幸せだと思う。ただし、それにはコンサルティングをして地域が適切に判断できるよう協力しないとイケないから、そう簡単ではないと思う。

事務局：それから、活動の評価も、前回と比べると少しずつだが改善しているという時に、委員会としてどのように評価していくかということも重要。恐竜渓谷ふくい勝山の例は、前々から大きな課題はあったけれども、少しずつ改善できてきたという現場の思いもあった。それも含めて今後の審査のあり方では、どのようにコンサルティングしていくか、どういう活動が必要とされているかということも重要かと思う。

委員：そういう意味では、箱根も改善はしているがという話ではないだろうか。

委員：改善はしているけれど、結果に結びついているかといわれると、それはまた別ではないか。

委員長：箱根の場合は、グリーンカードを出している。課題の改善にはあと4年くらいかかりそうという判断だった。

それでは、次の公開情報共有も迫ってきているので、このあたりで閉会としたい。

どうもありがとうございました。